化されるかにもっとも大きな関心をもつものである。

はじめに記したように改善，改革を考える場合の 1) → 2) → 3) の方向への過程と，一方利用者の 3) → 2) の方向への過程がうまくかみ合い，利用者のもっている細かい問題，あるいは近い将来当面するであろう問題の解決に案がどうとりくむかにもっとも注目する。ライブラリー・システムとごく日常的な小さな実際的な問題のひとつひとつの結びつきとそれがどのように解決されるかの検討がこれからの大きな問題ではなかろうか。

工学部　教授　金　多　　潔

大学の改革は，いろいろな問題について，あらゆる角度から慎重な検討が加えられつつあって，やがて新しい具体的な形に落着くことであろう。その結果が漸定的に，あるいはまた最終的にどのような姿になって現われてくるかということは筆者には予測もつかないけれども，問題を図書館のみにしぼって見てもそこには沢山の課題が山積して行くように思われる。

自然科学，社会科学，人文科学のどの分野がとくに多いかは明らかではないが，わが京大図書館に1年間に受け入れられる蔵書だけでも10万冊を超え，その比率が年々高まって行く傾向にあるのであって，このままで過せば遠からずして，いやすでに，書庫のスペースは一杯に満たされてしまうことは自明である。

その傾向は本部図書館の分室ともいうべき私どもの教室図書館においてはより深刻なものとなっている。当初は研究室とか教官室にする心算で建設された教室の一角が書庫に使われ，蔵書で満たされて，段々とスペースを膨張させざるを得なくなっている。このために教室ではもともと狭い教室の各種スペースをやりくりしている訳であるが，いつも漸定的であって，恒久的な名案は見付かってはいない。

古い本は古きがゆえに，また一般に得難いがゆえに簡単に処分してしまう訳にはゆかない。反面，最新の知識を盛り込んだ新刊書は多くの研究者・学生から強い要望のあるところである。これらを保持し管理する図書館はただ今までと同様な形で膨張し続けなければならないものだろうか？　情報過多といって片づけてしまわないで，この単調な膨張を何とか防ぐ方法・手段を大学改革に伴なう技術的な問題の一つとして多くの人々に考えてもらいたいものである。

別の話になるが，教室の図書室の利用者の中には図書室の利用規定や貸出規定を守らないで迷惑をかけているものも少なくない。期限内に返却すべき本を長期にわたって借りたまま，図書室係員からの督促にも応じないものもあると聞く。このようなモラルの低さではとても大学改革どころの次元ではなく，図書館に何かを望む以前に先ずわれわれ利用者の衿も正さなくてはならないと思うのである。

医学部　4回生　中　尾　紀　子

医学部では図書館の本はだれでも同じように利用できるので，医学部の図書館を利用する手続きに不便を感じたことはありません。しかし，教科書類がどんどん古くなっていくためか，本の冊数ほど内容は揃っていないと思います。また内科，外科など各科の間で充実度にむらがあるのではないかと感じています。各科の専門書は各教室の図書室の方が充実しており，また個人の蔵書が充実しているという友達もあります。私も含めて，図書館の意義を認識する必要があると思います。

図書館が利用しにくい理由として，医学部図書館は9時から5時まで開館していますが，